

## 〈研究ノート〉

### 日本伝統文化を背景とした「芸術」と「観想」

#### —合気道家多田宏の稽古の言葉より—

#### “Art” and “contemplation” in the Context of Traditional Japanese Culture

#### —From the Words of Aikido Master Hiroshi Tada—

向井 晃子

Akiko MUKAI

## I はじめに

本稿は、日本文化を背景にした美術及び芸術を考察するための基盤づくりの一端として、合気道月窓寺道場（以下、月窓寺道場）を主宰する多田宏（1929- ）が稽古で語る言葉を記録し、公開する。日本文化を背景にした美術及び芸術を考察するために、合気道に着目した契機については、拙稿「日本文化を背景とする『芸術』への岐路—合気道家多田宏インタビュー—」で述べたように、近代における日本の美術と芸術を巡る人為的な線引きに対する問題意識を端緒とする戦後前衛書をテーマにした拙研究と、筆者の作家としての制作経験が基になっている<sup>1</sup>。筆者は、現代書の作家活動の展開から日本的な身体性に興味を持ち、2013年に神戸で合気道凱風館に入門し、2019年に東京の月窓寺道場に移って稽古を続けている。

現在、芸術と武道が並べて語られることは異例であろう。しかし、例えば、2025年に大阪大学総合学術博物館で展覧会が予定されている女性水墨画家松本奉山（1925-2010）が弟子入りした松本尚山（1886-1970）は、姫路藩に伝わる御殿舞（ごてんまい）の家元として舞の隆盛に尽くしただけでなく、水墨画や書、武道にも通じる人物で、神戸で「芸術道場」を開いていた<sup>2</sup>。欧米から影響を受けた現在の日本の美術や芸術のカテゴライズでは、芸術と武道は遠くに位置するが、両者には次のような身体操作における共通性も見られる。筆者の実践経験に基づいて述べると、例えば、毛筆の筆の持ち方と剣術の刀の握り方は、双方とも手首を立てる共通点があり、毛筆の払いと剣術の袈裟斬りにおいては、用具にわずかな捻りを加えて体軸を回転させる身体操作の類似性がある。実践時の身体感覚も近いため、欧米の影響を受けたカテゴライズ以前の文化状況で両者を遠くはないものとして捉えていた可能性は考えられるであろう。そして、拙著『戦後前衛書にみる書のモダニズム—「日本近代美術」を周縁から問い直す』でも述べた通り、毛筆は身体の細かな操作を反映する用具であり、書は身体性と関

1 向井晃子「日本文化を背景とする「芸術」への岐路—合気道家多田宏インタビュー—」年報 Promis Vol.1 (2022) / Annual Research Report of Promis Vol.1(2022)、神戸大学国際文化学研究所・国際文化学研究推進インスティテュート (Promis)、2023年。

2 「生誕100周年記念 松本奉山—水墨画で世界を描く—」、大阪大学総合学術博物館、2025年4月26日～2025年6月28日。

わりが深い<sup>3</sup>。書画同源という言葉にもあるように、毛筆の筆法は書画双方に通じる。これらを踏まえると、先述の松本尚山が舞、書、水墨画、武道に通じていた例は、それらに共通する身体性の基盤があったと見ることもできよう。他にも、例えば茶道において所作が重視されているように、身体を介した日本独自の「芸術」のあり方が存在する。日本の現在の美術や芸術の分類は、そもそもは、明治期に、植民地時代であった当時の世界情勢から、欧米列強に対抗する目的で、急速に文明開花を進めたという歴史的な事情があって成立した経緯があるが、それを現在から検証するにあたり、そうした分類にこだわらない本稿のような視点はあって良いだろう。そして現在、世界的な美術史研究において「近代」そのものの問い直しが進み、西欧中心に偏っていた視点への批判から、「美術」研究の周縁におかれていたジャンルや、周縁の美術の視点へも目が向けられつつある。こうした学術研究の潮流もあり、今後、武道を文化や芸術の視点から検証する重要性が高まることは十分に考えられる。また、後述するように本稿で言及する「観想」については、学際的な学術分野で注目され始めており、このような観点においても、本稿の視点は有効であり、本稿の内容は貴重な資料となろう。

本稿で公開する稽古の言葉は、合気道月窓寺道場での調査で記録されたものである。次章では、まず、これらの言葉がどのような状況で語られているのかを明らかにし、続いて、稽古の言葉を記述する。本稿の公開については、道場の主宰者である多田の確認と同意を得ている。

## II 月窓寺道場での稽古概要と稽古の言葉

### 2.1 月窓寺道場での稽古概要

月窓寺道場は、1976年(昭和51年)6月に、曹洞宗系単立(禅宗)の雲洞山月窓寺の境内に創設された。雲洞山月窓寺は1659年(万治2年)、吉祥寺村の開村とともに洞巖龍雲大和尚によって開創されたと伝えられるが、『月窓寺史』ではそれ以前からの存在が記されている<sup>4</sup>。吉祥寺村の開村は、1657年(明暦3年)、江戸史上最大の火事とされる明暦の大火後の都市改造で、武家屋敷や寺社が移転したことに伴い、吉祥寺門前の住民が五日市街道沿いの多摩郡野方領に移住させられたことによる<sup>5</sup>。吉祥寺の地域と所縁の深いこの寺院内に道場が創設されている経緯は、当時の住職村尾昭賢と多田の出会いにあった。この出会いについては、多田の著作『合気道に生きる』に詳しい<sup>6</sup>。

合気道は、大正から昭和初期に植芝盛平(1883-1969)によって創始された近代武道で、植芝が修めた数多くの日本古来の武道、武術が基になっている。戦後、二代目道主の植芝吉祥丸(1921-1999)が合気道の一般への普及をはじめ、大学の部活動やカルチャーセンターなどでも合気道を実践できるシステムが整えられた。同時期に、海外への普及も始まり、現在では約140ヶ国に組織・団体がある<sup>7</sup>。多田は植芝盛平の直弟子であり、1929年(昭和4年)に東京で生まれ、95歳の現在も、現役で活動している。1964年(昭和39年)にイタリアへ渡りイタリア合気会を創設、欧州での合気道普及に大きな役割を果たすとともに、日本では合気会本部師範、防衛庁師範を務め、早稲田大学、東京大学な

3 向井晃子『戦後前衛書にみる書のモダニズム―「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

4 『月窓寺史』によると、それ以前の墓碑があり1659年(万治2年)は、中興の開山と称すべき、とされている。『月窓寺史』私家版、2022年12月第5刷発行。

5 内閣府防災情報のページ、第2回災害教訓の継承に関する専門調査会、資料2-7:災害教訓の継承に関する専門調査会報告書原案「1657 明暦の江戸大火」:<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/2/>

6 多田宏『合気道に生きる』日本武道館。

7 公益財団法人合気会 Web「合気道について」:<http://www.aikikai.or.jp/aikido/about.html>

多くの大学合気道会設立に尽力した、戦後の国内外での合気道普及においても重要な人物である。現在、月窓寺道場と合気道自由が丘道場を主宰して日常的な稽古を行っており、国内外の講習会での指導も行っている。月窓寺道場の稽古内容としては、「動く禅としての合気道」として、「気の錬磨：日本伝統の稽古法について。呼吸法の基本。気の流れ」と「基本動作：柔軟運動、合気体操、足さばき、受け身等」「技：基本技から武器取り。合気剣、合気杖 等」が掲げられている<sup>8</sup>。呼吸法は合気道のベースとして重視されており、2023年には著作 *L'énergie du souffle - Ki No Renma: Les principes de l'enseignement japonais du ki no renma* がフランスで出版され、それを大幅に改訂した『生命の力を高める呼吸－呼吸法から瞑想まで「気の錬磨」のすべて』が2024年に日本で出版された<sup>9</sup>。そもそも日本では「芸術」は「武術」であったと語り、著作『合気道に生きる』にも「芸術の時と場」という項目がある多田の合気道の実践は、呼吸法と瞑想に基づき「相手や対象と対立せずと同化すること」が重視されている<sup>10</sup>。

合気道は、基本的に二人一組で技を行うが、一方が「取り」ともう一方が「受け」の役割を担う。公益財団法人合気会のWebには、「合気道は相手といたずらに強弱を競いません。入身と転換の体捌きと呼吸力から生まれる技によって、お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね、心身の錬成を図るのを目的としています。また、合気道は他人と優劣を競うことをしないため、試合や競技を行いません」と説明されている<sup>11</sup>。技を演武する「演武会」はあるが、採点はなされない。参加する各自が、日々の稽古を通じてそれぞれの求める合気道を研究、実践するため多様性もあり、例えば、毎年一回開催される全日本演武会では、様々な合気道を見ることができるといえる。本稿は、このように展開する合気道の中でも、筆者が稽古に参加し、調査を実施している月窓寺道場における稽古の言葉を記録するものである。上述のように多田は、合気道を「同化する武道」と表現しており、相手や対象と対立せずと同化する稽古が実践されている。

現在、月窓寺道場は、15歳以上の一般の部と中学生以下の少年部に分かれて稽古が行われている。一般の部では毎回60～80人程度の参加者があり、手本が示された後、10組に分かれて、取りと受けの役割を交代しながらその手本の技を稽古する。各部での細かなクラス分けはなく、男女や技術の熟達度を問わず門下生が一同に会して、稽古に励んでいる。一般の部の稽古日と時間は、下記の通りである。

火曜、金曜 午前 8:00-9:15、午後 6:15-7:15、7:30-8:30  
土曜 午後 6:00-7:10、7:20-8:20<sup>12</sup>

「二部」と呼ばれる火曜、金曜の7:30-8:30、土曜の7:20-8:20の稽古を多田が担当し、稽古冒頭に約15分間の呼吸法が行われる。続いて、技を三つ程度行い、気の感応と呼ばれる「気」の稽古があり、最後に呼吸技の一つ稽古する流れが、二部の標準的な稽古内容になっている。技の稽古では手本が示

8 合気道月窓寺道場 Web「稽古内容」：<https://www.aikidotadajuku.com/>

9 Tada Hiroshi, *L'énergie du souffle - Ki No Renma: Les principes de l'enseignement japonais du ki no renma*, HACHETTE PRAT, 2023. 多田宏『生命の力を高める呼吸－呼吸法から瞑想まで「気の錬磨」のすべて』、世界文化社、2024年。

10 多田『合気道に生きる』。

11 公益財団法人合気会 Web「合気道とは」：<http://www.aikikai.or.jp/aikido/index.html>

12 合気道月窓寺道場 Web「入門案内」：<https://www.aikidotadajuku.com/>

され、体の使い方について解説がなされることもある。その際に、単なる体の動かし方のみに留まらず、体と心が一体である東洋的な心身一如の世界観／宇宙観に基づいた指導がなされている。そして、その心身一如は日本の伝統的な芸術全般につながっており、そもそも日本では「芸術」は「武術」という意味で使われていたと語られている。次節では、そのような稽古の言葉を記録する。

## 2.2 稽古の言葉：見えない世界を観想する「芸術」

本節では、本稿の趣旨に基づき、稽古時に芸術が語られている部分及び、体と心が一体である東洋的な心身一如の世界観／宇宙観に関する部分を中心に、稽古で語られた言葉の文字起こしを記述する。文字起こしについては、文末はですます調を基本とした。また、道場の門下生へ向けて合気道を実践している中で語られる言葉であるため、適宜、その前提について補足を入れ、文章を整えた。

まず、本節の起点として、2024年10月25日の稽古で「芸術」について語られた部分を記録し、近年の学術的展開も踏まえて、ここで語られている「観想」について考察する。

### 2024年10月25日稽古第二部

芸術ってというのは、大体の本物の日本の芸術ってというのは、何か動作をやるとそれが消えてしまう、だからその一瞬に懸ける、そういう働きを言うんです。音楽は昔は、消えたんです。今は色んなシステムがあるから（録音して残せる）。物を作る人は物づくり、それもひとつの芸術です。その一回一回、ふわっと動くというのはすぐに消えてしまう。だけど、消えてしまって残ってないというのは（目の前には見えないだけで）、パーッと目を瞑って思い出してみると、ちゃんと、どういうふうに動いたかというのが、自分の中の記憶に（ある）。何千年も昔からだ。（そういう記憶の残り方は、）ずっとあったに違いない。

今だと山へ入って、キノコはどこにたくさんあるかって（いう情報を）、秘密にします。誰にでも教えたら、自分が取るのがなくなりますから。そういう（容易に人に教えられない情報を扱う）のを、（昔は）どうやって記憶していたか。そういうところにどうやって入ってくか、そういうのをパーッと（自分の内部に）描き出して、何千年も前からやってたに違いない。場合によっては、サーッと（記憶の思い出しを）やって、それを星との相関関係で方向をとっていた。そうやって覚えてて、そうやって発達した（能力）に違いないんです。

だから（合気道の体術で）一番大事なものは、パッと立った時に、相手がどういう位置にいるか。見えないのに、パッと立ったときにです。これから、はい動くぞ、って時に。そういうのは実際的なこういう身体の稽古では、いわゆる観想行です。（中略）見えない世界を描く。見えない精神世界を想像して描くんです。そうしたら相手がいた時もパーッとやったら、どこに立つかっていうのは、ほんとは動く前に決まるんです。

（中略）

戦いは機にありというのは、その上等な流れを捕まえられたら（良い。その捕まえる）1秒の何万分の一、何億分の一って瞬間を、（機と言っています）。そんなもの捕まえられっこないというのは、見える世界だけ相手してる人。見えない世界の中で生きている我々が、ちゃんとそういう世界で生かさしてもらってるんです。そうすると、呼吸法やこういうこと（体術）をやっていると、十分に自分に有効にしてくれているような働きをする方向に向かっているから、そういうチャンスが来ることになる。だからどんな芸術でも、もうこれでいいっていうのはないんです。

ここでは、自分の内部で見えない精神世界を想像して技のイメージを描き、それが実際の技の動きへ繋がるのが語られている。ここで、「観想」という言葉に注目したい。観想は、仏教用語としては、「特定の対象に向けて心を集中し、その姿や性質を観察すること。観念」というような意味があり、例えば、奈良県の當麻寺護念院では、客殿を『「観想」の場』として使用することを勧めている<sup>13</sup>。近年、この「観想」という言葉が、学術的な場で新たに注目されている。例えば、慶應義塾大学が2016年11月に、学部・研究科横断的な全塾的研究組織として設置した慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）において、2023年に観想研究センター（SU）が設置された。そこでは、「観想的実践」が、「近年、教育・医療・福祉・経営・政治等の様々な分野において『観想的実践』（Contemplative Practice）の重要性が注目されている。観想的実践は、心身の統合を基盤とし、身体感覚への気づきと、あらゆるものとのシステミックな相互依存性への気づきを育み、明晰かつ倫理的な意思決定のもと創造的循環型社会に向かうための、様々な学びの技法や文化的習わしを指す」と述べられており、「観想研究は、科学的アプローチと主観的経験および多様な文化からの古来の叡智を統合する学際分野であり、身体化された統合的知を重視する」とされている<sup>14</sup>。この視点は、先述した、世界的な美術史研究において多様な文化を尊重する潮流がある中で、日本の文化を背景とする「芸術」について取り上げ、身体性にも着目している本稿の趣旨とも共通する。学際的にもこのような動きがある中、伝統的な文化や芸術の点から合気道の実践が語られ、「観想」が着目されていることは、非常に重要である。観想と芸術と技の稽古の関連は、次のように語られている。

2024年10月25日稽古第二部より

なんのためこうやって見えない呼吸をやっているか、自分の場を透明にするためです。なるんです。何遍も同じこと言うから、また言ってると思うだろうけど、みんなこう（耳を通り抜けるジェスチャー）だから（笑）。経験があるから知ってると思うだろうけど。大先生（植芝盛平）が、大先生がそれをなさったのは、私が付いてる15年の間でいっぺんきりだ。いっぺんしかないことは何遍もあります。ありありと覚えてるんだけど。それも2、3人しかいない、もう稽古が終わったりしたあと。よっぽど機嫌が良くないとおっしゃらない。自分がどういう修行をしたか。昔の人はこう。昔の武芸者はこういうことをやってた。バーッと印を切って、臨・兵・闘・者、速いんだ、バーッとこういうふう動いて。それでそうやって場を透明にしてるんです。（中略）そういう呼吸法で、自分の場で。よくそれは、物を作ったり、あるいはバイオリニストで（使う人がいる）。プロのバイオリニスト、みんな知ってます、自分の場がどんなに大事かっていうのを。その場が作れなかったら、我々は自分の芸術を前進させることはできない。その見えない世界で、バーッとやって。だからバーツ（投げ技のお手本が示され、受け身が取られた音）。バーツ（受け身の音）て（相手と）同化してやる。バーツ、（受け身の音）。ビューンと（受け身の音）。ウァー（受け身の音）。そういう気持ちで、バーツ（受け身の音）バーツと（受け身の音）。自分の線を大きく流し出すんです。少しまだ動きが（十分でない時には）、投げようっていう身体感覚があるんです。投げようと思ってなくても。自分の体に、相手を。だからそれを、できるだけそれをなお

13 當麻寺護念院 Web <https://taimadera-gonenin.or.jp/tsudoi/kansou/>

14 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）観想研究センター（SU） Web <https://www.kgri.keio.ac.jp/project/research-centers/2023/A23-25.html>

すには、呼吸法とイメージ法っていうとちょっと違うけど、神経系統のコントロール方法があります。自分で自分を研究して、それをバーツと（行う）。だから何遍もいっているように、できた状態を想像するんです。できた状態を観想するんです。はい、やってみてください。

このように、呼吸によって整えられる場が芸術にとって重要であることが述べられ、そのような場で相手と同化する技を行う手本が示されている。そして、そうするためには、できた状態を観想することが重要だと述べられている。

稽古のスタイルは長い年月の中での変遷もあり、例えば、現在、公益財団法人合気会と日本武道協議会で理事を務める可児晋は、「私たちが大学の頃、多田先生は稽古では言葉での説明は少なく、お手本を示すだけでしたが、近年はよくお話になりますね」と振り返っている<sup>15</sup>。ただ、芸術に関する考え方としては、月窓寺道場を創立した際には既に、合気道が「気の流れの芸術」として捉えられていた。というのは、道場が開設された1976年（昭和51年）に開催された「合気道と音楽の会」は、「武道とは気の芸術である」ということを一般の人へ伝えるために実施された催しであったのだ<sup>16</sup>。この試みは好評を博し、第二回が1981年（昭和56年）、道場創立五周年記念行事の一環で行われ、その際のプログラムには、次のように記されていた。「私の過去長期にわたるイタリア滞在中、日頃の稽古で最も大切な入身、転換の間合や呼吸、いわゆる気の流れというものを音楽をはじめとする芸術の中に見出した事はとても興味あることでした<sup>17</sup>」。こうした芸術に関する視点は持ち続けられており、次に記述する2023年の稽古の中でも、芸術と日本文化についての言及がなされている。

2023年8月12日稽古第二部より

合気道は芸術です。何度も言っているように、芸術という日本語は、江戸時代には剣術を意味したんだ。芸術大意や、天狗芸術論という（剣術の）伝書もあり<sup>18</sup>。それで、幕末の文明開化の時にアーツという言葉に芸術を当てはめたんです。要するに、芸術というのは非常に重要な心と体の動作を、丁寧に行って、ある見えない形を作り出している。芸術というのは（目に見える）物を作るんじゃない。物を作るのは職人って、江戸時代には言われています。（芸術は）消えてしまうんだ、一瞬にして。一瞬にして消えるけど、（見えない形が）あったことは、絶対宇宙に残っています。

稽古をすると人間上手になります。なぜ上手になるか。人間だけじゃない。猿だろうが人間だろうが、魚だろうが植物だろうが、そうやって進化しています。宇宙が、進歩発展させるのに必要だから、そういう心の働きを、生物に実際に与えているんです。東洋的な物心一元論から言うと、そうなります。

ところが現代の我々は明治維新とそれから戦後のGHQの教育で、頭の半分が物心二元論に

---

15 「道主対談 普遍にして不変—三菱商事（株）元顧問／（公財）合気会理事／日本武道協議会理事可児晋」合気道探求第69号（2025年1月）、出版芸術社、15頁。

16 多田『合気道に生きる』。

17 多田『合気道に生きる』、318頁。

18 佚斎樗山著、石井邦夫訳注『天狗芸術論・猫の妙術』講談社学術文庫、2014年。原文は、おもに『武道宝鑑』（1934年、講談社刊）所収のものを底本とし、1729年（享保14年）刊『天狗芸術論』（国会図書館蔵）ほか諸本を参照。熊沢蕃山『芸術大意』高知県立高知城歴史博物館所蔵、国書データベース、<https://doi.org/10.20730/100160393>、2025年2月15日最終閲覧。

なっているんです。気が付かないうちに。だって幼稚園から大学まで、みんな、システムだって、役所の仕事だって、全部ヨーロッパシステムです。だから食い違いが出たりするんです。ヨーロッパで長い間、もう60年もやってるからわかります。(中略) だから合気道の稽古もだ。物心二元論的な稽古と物心一元論的な稽古では全く違う。物心一元論的な稽古をしなきゃ合気にはならない。同化しないんです。(中略) 合気道の稽古というのは同化的に稽古するんです。相手を技術で倒したりするんじゃなく、比較の世界を抜けて稽古をするというのは、なかなか普通考えられない。植芝盛平先生の(教えが)非常に難しいところ。だからさっき(の呼吸法のような)、なんで訳わかんないことやってたり、なんでこんなことやるんだろうな(と思うようなことをやるのは、)自分の見えない場を作るんです。見えない道場。そこは感覚が透明で比較をしない世界です。

対立やいろんなものは、比較をすることによって、差が分かって、違いができて、科学が発達、発展する。(しかし)それでは、最後の最後まで対立なんです。ところが東洋は(違う)。合気道も「顕幽一如(けんゆういちによ)の真諦(しんたい)を知れ」見える世界と見えない世界は一つであることを、真諦というのは絶対的真理です。仏教の言葉だ。真諦(しんてい)とも言うけど。そうするとこういう稽古でもパーと呼び出す。気力をもって相手を導き、両手をとらせる。ハーツ(技の手本を行い受け身が取られる音)。

ここでは、剣術の伝書の「芸術」という言葉が、明治維新の折に海外から来た言葉の訳語として当てられ、その後の教育の中で、そちらの用法が主流となった、と語られている。「芸術・美術」と「アート」という言葉の関わりについては、現在では一般的な辞典にも、明治初期に西周が英語の fine art を「美術」と直訳し、その後定着していく中で、「美術」は造形芸術のみを指すようになったことや、元来、fine art は芸術全般を広く含めていうこともあり、実際、明治中期までは広く一般にも、「詩歌、小説、音楽」の訳語としても「美術」が使用されていたこと、<sup>19</sup>が記載されている。

ただ、ここで重要な点は、現在、武道が実践されている場において、こうした日本の近代の歩みを踏まえて「芸術」が捉えられ、そこに武道が位置付けられている点である。冒頭に述べた、現在の国際的な美術史研究の潮流を踏まえると、この実践は、明治以来の日本の「美術」と「芸術」の状況が、現在の武道の実践の場から問い直されていると見ることもできる。

そして、欧米からの影響を受け続ける日本に対しては、次のようにも語られている。

2023年7月1日稽古第二部より

この間も言ったマインドフルネス。ああいう立派な瞑想法が、なぜ日本でできなかったのか。立派な禅が伝わっているし、お医者さんも立派だけど、まだ科学の働きを(日本では)自在に扱うことができないから、禅を習ったアメリカの人がこれは素晴らしいと言ってマインドフルネスを作った。(中略)なんで外から来たマインドフルネスをわずかな時間で(受け入れるシステムを)作って、日本中が、政府も大銀行も向こうから人を呼んでやらなきゃいけないようになる(のか)。簡単に言うとね、ヨーロッパから見ると文化的には日本はヨーロッパの植民地だ。脳の考え方とかもっと自主的にやればすばらしいのに、(なぜ)やらないのか。まだ引っかかってる。

19 精選版 日本国語大辞典、小学館 日本大百科全書(ニッポニカ) [https://kotobank.jp/word/%E7%BE%8E%E8%A1%93-119726#goog\\_rewarded](https://kotobank.jp/word/%E7%BE%8E%E8%A1%93-119726#goog_rewarded)、2025年1月23日最終閲覧。

遅いんだ。物心一元論的な発想とまだ合わないところがあるから。ところが、見えない世界の物理学が発達すると、それ（物心一元論的な発想を科学的に語るもの）がどんどん出てくる。そうすると、それが入ってくる。そこを気を付けないと。

ここでは、自らの文化に源があるものが、いわば逆輸入される形で広く普及される日本の状況が、注目されている。そしてそうした状況で瞑想がマインドフルネスとして捉え直されたように、「見えない世界の物理学」と表現されている量子物理学が発展すると、これまで日本では非科学的とされ科学で扱われなかった現象も、積極的に扱われうる時代が来るであろうことが語られている<sup>20</sup>。日本では、欧米を意識してきた近代の歩みの影響から、欧米で科学的に研究されたものを科学として認識するあまり、そこには入らない自らの文化的ルーツにある要素を科学的に語る姿勢を持たず、それが欧米から逆輸入される現象が指摘され、将来的にもそれが起こる可能性が語られているのだ。科学の発展によって「非科学的」な分野を科学的に扱えるようにする試みが本来の科学のアプローチであることに對し、西欧を源とする学術や科学を明治期に移入した日本が欧米の後追いをしている状況であったこと、そしてそれが現在も続いていることが、稽古の中で語られているのである。

### III むすびにかえて

異なる文化を尊重しつつ対話する世界的な美術史研究の潮流を踏まえると、本稿で見た、日本の伝統的な文化を踏まえて「芸術」が語られ実践されている合気道の稽古の言葉は、日本文化を背景にした美術及び芸術の考察にあたって、何らかの手掛かりを示すものであろう。身体的な実践の感覚自体を記録することは難しいが、少なくとも、このような視点での実践が存在することを記録に留めることの意義は十分にあると考える。また本稿で言及した「観想研究」が、科学的アプローチと主観的経験および多様な文化からの古来の叡智を統合する学際分野で、そこでは身体化された統合的知を重視されていることは、本稿で記録した稽古の言葉の中で投げかけられている問いに対して、学術的な動きが日本で実際に開始されている状況と捉えることもできる。また、日本社会そのものが、人口減少や在留外国人の増加、様々な文化の流入や海外との交易等によって大きく変化していくことが予想される中、何を「日本文化」や「伝統」と捉えるのかも、今後、様々な議論されていくであろう。そうした時に、本稿は 2025 年時点での状況の一端を提供するものである。

#### 【謝辞】

本稿には、鹿島美術財団美術研究助成の一部を使用しております。本稿の調査実施にあたり、多田宏師範、雲洞山月窓寺、合気道月窓寺道場並びに道場生の皆様方にご協力を賜りました。末筆ながら

---

20 現在のマインドフルネスの考え方は、1960年代のJ.カバットジンの開発・実践が礎となっており、例えば、2007年に出版された彼の著作の翻訳『マインドフルネスストレス低減法』（J.カバットジン著、春木豊訳『マインドフルネスストレス低減法』北大路書房、2007年）は、次のように紹介されている。「カバットジンの名手引書の復刊。呼吸への注意、静座瞑想、ポディー・スキャン、ヨーガ、歩行瞑想を体系的に組み合わせ、「禅思想」に通じた体験を得るためのエクササイズを一般人にわかりやすく紹介。著者の大学メディカルセンターで4000症例をもとに科学的に一般化」。北大路書房 Web： <https://www.kitaohji.com/book/b579758.html>、2025年1月23日最終閲覧。「見えない世界の物理学」が量子物理学を指すことは、2023年8月12日の稽古中に語られている。また量子論について、2023年1月13日、2024年1月9日の稽古中に言及されている。

ここに記し、深くお礼申し上げます。

## 参考文献

〈未公刊資料〉

合気道月窓寺道場 Web : <https://www.aikidotadajuku.com/>、2025 年 1 月 23 日最終閲覧。

慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート (KGRI) 観想研究センター (SU) Web  
<https://www.kgri.keio.ac.jp/project/research-centers/2023/A23-25.html>、2025 年 1 月 23 日最終閲覧。

北大路書房 Web : <https://www.kitaohji.com/book/b579758.html>、2025 年 1 月 23 日最終閲覧。

熊沢蕃山『芸術大意』高知県立高知城歴史博物館所蔵、国書データベース、<https://doi.org/10.20730/100160393>、2025 年 2 月 15 日最終閲覧。

公益財団法人合気会 Web : <http://www.aikikai.or.jp/aikido/about.html>、2025 年 1 月 23 日最終閲覧。

當麻寺護念院 Web <https://taimadera-gonenin.or.jp/tsudoi/kansou/>、2025 年 1 月 23 日最終閲覧。

内閣府防災情報のページ、第 2 回災害教訓の継承に関する専門調査会、資料 2-7 : 災害教訓の継承に関する専門調査会報告書原案「1657 明暦の江戸大火」 : <https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/2/>、2025 年 1 月 23 日最終閲覧。

『月窓寺史』私家版、2022 年 12 月第 5 刷発行。

〈公刊資料〉

J. カバットジン著、春木豊訳『マインドフルネスストレス低減法』北大路書房、2007 年。

Tada Hiroshi, *L'énergie du souffle - Ki No Renma: Les principes de l'enseignement japonais du ki no renma*, HACHETTE PRAT, 2023.

「道主対談 普遍にして不変—三菱商事(株)元顧問／(公財)合気会理事／日本武道協議会理事可児晋」  
合気道探求第 69 号 (2025 年 1 月)、出版芸術社、

佚斎樗山、石井邦夫訳注『天狗芸術論・猫の妙術』講談社学術文庫、2014 年。

多田宏『合気道に生きる』日本武道館、2018 年。

多田宏『生命の力を高める呼吸—呼吸法から瞑想まで「気の錬磨」のすべて』、世界文化社、2024 年。

向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム——「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022 年。

向井晃子「日本文化を背景とする「芸術」への岐路—合気道家多田宏インタビュー—」年報 Promis Vol.1 (2022) / Annual Research Report of Promis Vol.1(2022)、神戸大学国際文化科学研究科・国際文化科学研究推進インスティテュート (Promis)、2023 年。